
遊戯王 二人の転生者

ハナズオウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 二人の転生者

【Nコード】

N9899S

【作者名】

ハナズオウ

【あらすじ】

いつの間にか遊戯王GXの世界に転移していた少年少女、彼らはこの世界でどのように過すしていくのか。

第一話 入学試験（前書き）

間違えて削除した小説を再投稿します。ついでに、話の内容も変わると思います。

第一話 入学試験

いつものように目を覚ました俺は鳴っている目覚まし時計を止めようとした時に違和感を感じた。

ふと目に入ったものが見覚えのないものだったからである。

何枚も壁に貼られている遊戯王のポスター。

当然、俺はこんなものを部屋に貼っていた記憶はない。しかし、俺以外にこれらを貼るような人は我が家にはいないはずだ。

この家で遊戯王をやっていたのは俺ぐらいだし、両親は遊戯王に全く興味を持っていなかった。俺には兄弟はいない。だから、俺が知らない間に遊戯王のポスターが貼られるわけがない。

「くそつ、やっぱり起きたばかりだし、頭が寝ぼけているのか」

しかし、何度瞬きしても部屋の光景は変わらない。ポスター以外は俺の部屋と同じだ。

机に置いてある受験表の写真はまさしく俺のものである。名前も直枝和人、間違いなく俺の名前である。

ん？ どうして受験表が俺の机の上にあるんだ。

そんな疑問が俺の中で生まれてくる。俺は高校二年生のはずだ。

俺はこんな時期まで受験表を大事に持っているような人間ではない。そして、受験表を改めて手に取ったとき、俺は何も言葉が出なかった。

デュエルアカデミア受験表

受験番号016番

はい？

デュエルアカデミアって遊戯王GXとか5D'sで出てくる学校の名前だったな。実は現実にもあったのか。それは知らなかったな。ハッハッハ。

「って、そんなわけないだろ」

自分にツツコミながらも頭の中は一つの結論を出した。

これはまさかの二次小説でよくある現実から異世界に転移というパターンか。

そこまで考えて、俺は頭を左右に振った。我ながら馬鹿なことを考えている。どうやらまだ寝ぼけているようだ。そもそもそんなことが起こるはずがない。どうせ、これは遊戯王好きな幼なじみの悪戯なんだろう。

「和人、いつまで寝ているの。紗耶香ちゃんから電話よ」

「ああ、今行く」

しかし、いくら幼なじみでも、これはやり過ぎだ。少し説教しなければならぬだろう。

「おい、さ「やあ、おはよう。和人くんは和人かな」」

電話の子機を受け取って部屋に戻ったところ、全く変わらない幼なじみの言葉に頭が痛くなる。

「朝から何言ってやがる。俺は俺だろうが。それよりお前、俺の部屋に悪戯しただろう。いくらお前でもやっていいことと悪いことが

あるぞ」

「少なくとも現在の私には心当たりがないね。その悪戯について後で聞くことにするが、私が言いたいことはそんなことじゃない」

こいつと電話をしながらも、テレビのスイッチを入れる。相変わらずの態度に、すでに説教する気は失せていた。適当に話して終わらせるつもりになっていたのだが、朝の番組に吹き飛ばされてしまった。

「すでに知つての通り、我がデュエルアカデミアではプロデュエリストを育成するプログラムは世界でもトップなノーね」

思わず固まってしまった。

聞き覚えのあるこのウザイ話し方、間違いなくクロノスだ。

「おい、紗耶香。これはいったいどうなっている」

「ほう、これは良かった。その言い方だと君は私が知っている君みたいだね」

「はい？」

それから紗耶香の話はにわかには信じられないものだった。紗耶香の部屋も自分が知らない遊戯王のポスターが何枚か貼られており、紗耶香自身も現在デュエルアカデミアの中等部に所属しているとのことだった。

「マジかよ」

今の俺にはそれしか言えない。紗耶香の話では紗耶香以外は間違いない。この世界の住人であるとのことだ。つまり、俺の両親も顔こそ一緒だが、俺が知らない両親なのだろう。

つまり、あの受験表は間違いない。本物だということだ。始めの俺の馬鹿みたいな想像が当たっていたらしい。

俺はどうやら異世界にでも来てしまったようだ。

マジでどうしよう？

しかし、ここは間違いなく現実だ。そんなことを悠長に考える時間は俺にはなかった。

俺が遊戯王GXの世界（時代がわかった理由は紗耶香からGXの登場人物がいることを教えてもらったおかげだ）に来てから数日、今日はデュエルアカデミアの実技試験日だ。

こちらに来て最初は混乱していたが、こちらに来た理由が分からないため、向こうに帰る方法に全く心当たりがない。

とりあえず幼なじみと合流するためにも何としてでもデュエルアカデミアに入学しなければならないのだ。

幸いにも家にあったカードは全て俺が持っているものと同じだったおかげで、作られていたデッキも俺が前の世界で使っていたものと同じだった。

それに、前の世界では俺はシンクロモンスターを使用しないタイプの人間だったので、こちらの世界でも困ることは特にない。

この時代がないカードに関しては気にしないことにした。アニメ

を見ている感じでは主人公たちも全部のカードを知っているわけじゃないようだし、個人しか持っていないようなカードもあるのだ。適当にごまかしておけばいいだろう。

「受験番号016番、準備ができたので早く来なさい」

はいはい、と。

紗耶香の奴も来ているらしいので無様なデュエルはできない。

あいつのことは一応探してみたが、見つからなかった。きつとどこか隠れて見ているのだろう。

あいつはそういう奴なのだ。

「受験番号016番、直枝和人。よろしくお願ひします」

試験官に一礼して、シャッフルしたデッキをセットし、デュエルディスクを構えた。

「では、私が先攻だ」

いつも思うのだが、先攻と後攻が早い者勝ちってどうよ？

友達と遊びでやるのとは違うのだ。特に今回は試験である。そういう場合なら普通はもっと厳しくするべきだと俺は思うのだが。

「私は《デュミナイエルフ》を召喚、カードを二枚セットしてターンエンドだ。さあ、次は君のターンだよ」

試験官 LP4000

手札 3枚

モンスター 《デュミナイエルフ》 攻1900

魔法、罨 リバーズ2枚

やれやれ。

手札を見て思い浮かんだ言葉がそれだった。前の世界ではこんな風に手札が揃うことはない。それに、そもそも前の世界ではライフは8000だ。

しょうがない。すぐ終わらせるか。

「俺は手札から《強欲な壺》を発動。デッキから二枚ドロウする。さらに《増援》を発動し、デッキから《切り込み隊長》を手札に加える。そのまま《切り込み隊長》を召喚し、さらに《ゴブリン暗殺部隊》を手札から特殊召喚する」

デュエルディスクにカードを置くと、俺の場に二体のモンスターが現れた。しかし、いつ見てもソリッドビジョンには驚かされる。いつか元の世界でも実現してほしいものだな。

「更に手札から《ハリケーン》を発動する」

「(くっ、せつかくセットした《ミラーフォース》と《攻撃の無力化》が)しかし、攻撃力はまだ《デュミナイエルフ》の方が上だ」

それを何とかするために先に《ハリケーン》を発動したんだろうが。周りもこいつは何やっているんだ、みたいな顔をするな。

「《団結の力》と手札を一枚捨てて《閃光の双剣・トライス》を《ゴブリン暗殺部隊》に装備する」

《団結の力》は自分の場のモンスター一体につき、攻撃力を800アップさせる装備魔法。そして《閃光の双剣・トライス》は攻撃

力を500下げる代わりに二回攻撃できる装備魔法である。これは前の世界で俺が好んで使う戦法の一つだ。

《ゴブリン暗殺部隊》

攻1300 2900 2400

「わざわざ言う必要はないでしょうけど、《ゴブリン暗殺部隊》にはダイレクトアタックする効果があります」

「なっ、それでは」

俺の説明に試験官や周りの人間は驚いた顔になる。

「ええ、これで二回ダイレクトアタックして終わりです。と言いたいですけど、少し遊ばせてもらいますよ。《ゴブリン暗殺部隊》で、《デュミナイエルフ》を攻撃する」

ゴブリンたちの攻撃で、あっさりと《デュミナイエルフ》は破壊される。

しかし、暗殺部隊のはずなのに何で数人で袋叩きにするんだろうか。

試験官 LP4000 3500

「さらにトライスの効果で二回目の攻撃、ダイレクトアタック」

試験官 LP3500 1100

「そして、ラストです《切り込み隊長》でダイレクトアタック」

「馬鹿な」

試験官 LP11000

思った以上にあっさり1ターンキルができたな。やっぱり4000だと早く決着するのでつまらない。デュエルアカデミアに行ったら紗耶香とは8000でする方が楽しいかもしれない。まあ、今日の場合は手札も揃い過ぎだったし、こんなことはもうできないだろう。

仕方ない。暇な時間であいつを探すことにするか。

「君、一つ聞いてもいいか」

そんな考え事をしていると、試験官の人が俺に声をかけてきた。

「何ですか」

「いや、どうして《デュミニエルフ》に攻撃したのか、気になってね。教えてもらっていいかな」

「そんなこと、決まっているじゃないですか」

俺がわざわざダイレクトアタックしなかった理由、それは単純な理由だ。

「相手のフィールドを一掃した方が面白いと思ったからですよ。それに言ったじゃないですか。少し遊びますって」

そう言っただけ俺は啞然とする試験官のことを意識から消して紗耶香

のことを探しに行った。

side 紗耶香

「やあ、天上院くんに丸藤先輩。今年の受験生はどうだったかな」

今日、受験前に和人と顔を合わせなかったのは実はわざとだったりする。

私の知り合いだと教える前に、原作の二人にチェックしてもらいたかったのだ。

「有望なのはさっきの16番か」

「確かにそうね。いくら試験官が試験用のデッキを使っているといつても、あの1ターンキルは見事だったわ」

良かったな、和人くん。二人からも誉められているぞ。

「そうか。それなら幼なじみとしても鼻が高いね」

「えっ、あなたに男子の知り合いがいたの」

明日香くん、そんなに私に男子の知り合いがいることが驚くことかな。

「まあね。デュエルアカデミアに入る前は毎日のようにデュエルしたものだよ。天上院くんたちも興味があるかい？」

「それじゃあ、最初からダイレクトアタックしなかった理由はわか

るの？」

「たぶん面白そうだったからだと思うよ。彼なりの余裕を見せたの
だろうね」

あれは和人くんの癖だ。元々、勝敗に強い興味がない和人くんは
自分がやりたいようにプレイする時がある。私と一緒に大会などに
出た時は勝利を最優先しているが、それ以外では余計なことをする
癖があるのだ。

まあ、元の世界では所詮娯楽だったからしょうがないかもしれない
いが、この世界ではデュエルが強い比重を占めている。あの癖は早
い内に直させないといけないかもしれない。

その後は私も加わって三人で、たわいない雑談を交わしながら、
主人公である十代くんのデュエルを観察していた。

「どうやら今年は面白そうなのが二人いるみたいだな」

「そうね。あの111番、あなたの幼なじみとは違う意味で、あつ
ちの子も面白そうだわ」

やはり羨ましいね。十代くんの不利な状況でも必要なカードを引
き当てる能力は。

「確かに。面白そうではあるね」

明日香くんの言う通りだ。さすがは原作の主人公だね。

デュエルは原作通りで、最後はクロノスのエースモンスターを十
代のモンスターが倒して勝った。

やれやれ。異世界に来てしまった時はどうしようか悩んだものだが、
今はアニメの世界に介入できることが楽しみだよ。

この世界には和人くんもいる。私は一人ではないのだ。
だから、まずは必死に私を探しているだろう。和人くんを探すこと
にしようかな。

第二話 深夜のアンティ・デュエル

「ふむ、オシリスレッドか」

袖を通した制服と自分が住むことになる寮を見て、俺はため息を吐いた。

やっぱりアレが原因か。

試験官相手にやってしまった俺の癖だ。どう考えてもあの態度はない。面白そうだから遊んでみたって、先生を舐めすぎだ。相手が使っているのは受験用の手加減デッキだと聞いていたことを完全に忘れてた。

元の世界で遊戯王が遊びだった頃の間が抜けてなかったのがいけなかったかもしれない。

ま、まあ、紗耶香が言った通り原作に絡むつもりなら、オシリスレッドで都合が良かったかもしれないな。

だが、レッド寮のボロさは何とかならないのだろうか。いくら実力主義でも、これは差別し過ぎだと思っぞ。俺は普通に住めるなら気にしないからいいけど。

「お、なかなか良いじゃないか」

十代、お前の目は大丈夫か？

このボロい寮を見て、良いと思えるお前の感性に驚きだよ。

まあ、そんなことはどうでもいい。今はそんなに関わるつもりはなかったりする。こいつと関わるのは紗耶香から原作の流れを聞いてからだ。下手にコイツらに関わって流れを変えたくない。

しかし、もう一人、十代の傍にいるチビの名前って何だっけ？

入学する前に一通り登場人物について紗耶香から聞いた気がするけど、思い出せない。まあ、覚えていないなら大した奴じゃないんだろう。とりあえず自分の部屋に行くか。

大徳寺先生が言うには俺の部屋は余った一部屋らしい。普通の部屋より少しせまい代わりに一人で使えるとのことだ。俺にとって都合が良かった。知らない人間と同じ部屋で生活するのは好きじゃない。

「よう、紗耶香か。俺は寮に着いたところだ」

とりあえずは支給されたPDAで紗耶香に連絡する。着いたらすぐに電話するように言っていたしな。

「やれやれ、馬鹿なことをやるからオシリスレッドになるのだよ。早くその癖を直すべきだね」

くそっ、相変わらず言いたいことをはつきり言ってくれるな。でも、言っていることは事実だけに何も言い返せない。

「うるさいな。始めから原作に関わるつもりならこっちの方が都合が良いだろ」

「それは結果論だろ。たまたまじゃないか。もっと心の底から反省すべきだね」

「くっ。とりあえず、これからどうするのか教えてくれ」

これ以上、コイツと口喧嘩をして勝てる気がしない。「こらで話の流れを変えないと。」

「それなら同じ寮の十代くんと翔くんの二人の行動を気にしておいてくれればいいよ。君は人と仲良くなるのは苦手だったし、友達になれとまでは言わないから」

それにしても十代はともかく翔って誰だ？

「なあ、翔って誰なんだ？」

「もう忘れたのかい。水色の髪をした背の低い少年が十代くんの近くにいただろう」

ああ、あのチビが翔か。そういえば、そんな名前だった。

「分かった。その二人のことを気にしたらいいんだな」

「全く、あれほど重要な人間を入学前に教えたのに、もう忘れていたのかい。まあ、とりあえず最初は同じ寮生の君にしっかりとやりやってみよう」

そして、紗耶香としばらく雑談した後、電話を切る。

とりあえず紗耶香に言われたことだし、まずは二人を探すか。

部屋から出ると目的の二人がちょうど部屋から出てくるところだった。

「よう、じゅ、ごほん。お前らもオシリスレッドみたいだな」

一瞬、十代のことを名前で呼びそうになるが、俺とは面識がないのに名前で呼ぶのはおかしいので言い直す。

「よう、お前もレッドなんだな。俺は遊戯十代っていうんだ。お前の名前は」

「俺の名前は直枝和人だ。よろしく」

「おう、よろしくな、和人」

「僕の名前は丸藤翔です。よろしくツス」

「ああ、よろしくな」

簡単に挨拶をした後、暇だったから俺も二人について行くことにした。適当に二人と雑談を交していると、自然と話題はデュエルに移っていく。

「そういえば和人さんの入学デュエルは凄かったツス。試験官を1ターンキルするなんて」

あれは元の世界では使えない《強欲な壺》と《天使の施し》をデッキに入れられたから可能だっただけだ。それに、俺が作ったデッキではライフポイントが8000ならかなり穴があるデッキでもある。誰かに誉められるようなデッキではない。

「そうか。あの時は手札が揃い過ぎだったからな。俺から言わせてもらえるなら十代のあのデュエルの方が驚きだったけどな。クロノス先生はあれでもデュエルアカデミアの実技での最高責任者らしいからな」

「へえ、和人もデュエル強いのか。後でデュエルしないか」

ふむ、原作に絡むなら一回ぐらいデュエルしておいた方が良さそうだ。すぐにはするつもりはないけど。

「また今度な。同じ寮なら授業とかで機会があるだろう。俺も今は荷物の整理とかもしたいし、止めておくよ」

「ちえー、やりたいのにな」

「兄貴は本当にデュエルが好きですね」

「だってデュエルって楽しいじゃん。俺はもっとやりたいくらいだぜ」

本当にデュエルが楽しいんだろうな。十代の表情はすごくウキウキしている。

少し羨ましいな。大抵のことをデュエルで決める俺には想像できない世界で、こんなにデュエルを楽しみにできるなんて。

俺は確かに遊びでも負けることは嫌いだから、デュエルも真面目に勝つつもりだ。しかし、俺はどんな苦しいときもデュエルは楽しいと思える人間ではない。

それに俺は紗耶香に言われて、このデュエルアカデミアに入学してきただけだ。正直言って今のところはプロになるつもりは全くない。俺は今が楽しければそれだけで満足だし、こちらの生活もそう悪いものでもない。でも、命を賭けるようなデュエルになるなら楽しむ要素のない、例え嫌われるようなデッキを使ってでも勝ちにくく。

まあ、しばらくはクロノスの嫌がらせが続く程度だろうし、命が賭けることはないだろうから、普通じゃない学園生活をおとなしく楽しませてもらうつもりだ。

ささやかな歓迎会の後、部屋に戻ると紗耶香から何通かメールが来ていた。

『今日は万丈目くんと十代くんのアンティデュエルがある日だよ。君に明日香くんも紹介したいから絶対に来てくれ』

「そういや、そんなイベントがあるって言っていたな。」

しかし、いくらブルーが優遇されているからって、校則で禁止されているアンティデュエルまでやるとは、とことん今のブルー生徒って性根が腐っているな。

それでも、明日香を紹介してもらえる良い機会だ。行かない理由がないな。

念のために制服の上から黒いコートを来て、目立たないようにしてから寮を出る。寮を出るときにファラオに見つかりそうになったけど、そこを何とかクリアして、デュエルフィールドまで走って行った。

デュエルフィールドに着くと、今まさにデュエルが始まるうとしているところだ。

十代の後ろには翔と紗耶香、明日香の三人が並んでいる。

「悪い、遅れたか」

「いや、グッドタイミングだよ。今から始まるよところだ」

「あ、和人くん。和人くんも来たんですか」

「まあな。寮を出ようとする二人を見かけたから、コートを着てから追いかけたんだよ」

「えっと」

「ああ、ちゃんと紹介してなかったね。彼が私の幼なじみの直枝和人くんだよ」

「紹介された通り、直枝和人だ。よろしくな、天上院」

「紗耶香の知り合いなら私のことは明日香でいいわ」

「なら、今度からは明日香って呼ばせてもらおう」

「ふむ。自己紹介もこれまでのようだね。万丈目くんたちのデュエルが始まるようだ」

紗耶香に言われて十代たちの方に目を向けると、二人とも手札をドローしてデュエルを始めようとしていた。

side 紗耶香

結局、二人のデュエルはガードマンが来たところで中断になるという原作通りの展開を見せてくれた。十代くんが引いた最後のカードは《死者蘇生》、これも原作通りだ。順調に進んでくれているようだである。

「それでは和人くん、ハマをして見つからないでくれよ。せっかくデュエルアカデミアに入学したのに、入学初日で退学なんてシャレにならないからね。十代くんたちも今後はよろしく頼むよ」

「うるさい。明日香も気をつけてな。紗耶香、お前も一応は女子な

「んだから気をつけるよ」

和人くん、そこで一応は余計だよ。

「おう、またな」

「バイバイっス」

三人と別れて、しばらく走って女子寮の近くまで来たところで、ようやくペースを緩める。

「やれやれ、結構ヒヤヒヤした時間だったよ。でも、少し楽しかったし、ある程度は十代くんの実力を把握できたかな」

「あら、あなたも十代が目当てだったの」

「少しね。試験の日に、クロノス先生に勝ったのが本当に運かどうかを確かめたくなったのだよ」

「なるほど、結果は？」

ふむ。やっぱり私としては運としか言えないな。彼の恐ろしいところはドローで欲しいカードを引き当てることができる異常とも言える引きの強さ、逆に言えば、それほどにまでカードに愛されていると言えるかもしれない。

「まだ結論を出すのは早いかな。もう少し様子を見る予定だよ」

「それは私も同意見ね」

「なら、次の機会にでも期待しようじゃないか」

どうせ次の機会はずぐにくるはずだ。あのラブレター事件はすぐにも起こるはずだし、そこで明日香くんは十代に興味を持つようになるのだ。

そうだね。いつそのこと和人くんに協力してもらって、近くにいくクロノス先生も捕まえてしまうのも面白いかもしれないね。

side 和人

なんだ、今。異常なまでの寒気を感じたんだが、また紗耶香の奴が俺に無茶をさせるつもりかもしれない。

「くっそー、後少しだったのに」

「まあ、俺は引き分けで良かったと思うぞ」

「何でだよ、和人」

おいおい、少しはその頭で考えてみるよ。

「あのな。相手はブルーの生徒だぞ。デュエルアカデミアではオベリスクブルーはかなり優遇されているんだ。下手に問題を起こしたら、レッドの責任にされる可能性もあるんだ」

「レッドの責任？」

「今回の場合は勝つたら、カードを取らなくても、レッドに強引にデュエルさせられたとブルーが証言するだけで、お前を退学させるかもしれない。負けたら、当然カードを取り上げられ、お前がいく

「元々は自分のカードだと言っても先生たちはブルーを信じる可能性があった」

「そんな、酷いっス」

「それがこのデュエルアカデミアでは普通なんだよ。ここに入るつもりだったなら、それぐらいは知っておけよ。」

「まあ、安心しろよ、十代。今回みたいに不完全に終わった以上、相手も大人しくしているとは思えないし、何らかの形でもう一回デュエルする機会があるさ」

「どうせ月一テストで十代は万丈目と再戦するはずだ。その時に《ハネクリボー》を《ハネクリボー Lv.10》にする《進化する翼》をトメさんから貰えるって紗耶香の奴が言っていた気がする。俺は誰と戦うことになるのだろうな。あの試験結果だったのに、オシリスレッドに入れられたことから、俺もクロノスに睨まれている可能性がある。」

「月一テストで、本来なら同じ寮の人間とデュエルのはずのところをもしかしたら十代と同じようにオベリスクブルーの人間と戦うかもしれない。」

「しかし、思った以上にここは酷い状況だ。俺もここまで馬鹿が多いとは思わなかったぞ。」

「十代、とりあえず俺は寝るぞ。夜も遅いからな」

「おう、お休み」

「お休みっス」

部屋に戻った後、すぐさまPDAの電源を入れる。

「やあ、和人くん。無事に部屋へ戻れたようだね。もう私たちも部屋に戻ったよ」

「あのな、もう少し事前に説明しておけ。今日なんかギリギリだったじゃないか」

こんなに夜遅くまで起きることがわかっていたら、俺も仮眠をとるつもりだったのに。

「この程度のイベントぐらいはぶつつけ本番でも何とかなるさ。本当の重要なときは事前に説明しておくよ」

「わかった。これ以上は何も言わん。おやすみ」

「うむ、おやすみ」

しかし、入学初っ端からこれかよ。意外と体感してみれば面倒なものだな。どうせ今後とも騒動がおこるなら昼間のうちにしてくれよ。俺は夜はたっぷり寝る派なんだ。絶対に夜更かしなんてごめんだからな。

第3話 翔くんのラブレター事件？（前書き）

デュエル内容がだいぶ変わりました。

第3話 翔くんのラブレター事件？

side 紗耶香

そろそろだと思ったよ。今日の翔くんはやたらにソワソワしていたからね。

しかし、十代くんは授業は真面目に受けた方がいいと思うよ。先生に対してあんな態度はあまり良くない。ここはデュエルを学びに来ている以上はカードの知識もちゃんと勉強しないとね。私はデュエルに強いだけでは駄目だと思うよ。

まあ、今はラブレター事件の方が先かな。

「やあ、明日香くん。翔くんを連れてどこに行くつもりだい」

どうでもいいけど、わざわざ翔くんを女子寮に入れる必要はあったのかな。外で捕まえた方が先生にも見つからないで済む可能性が高いよ。

現に先ほど鮎川先生に見つかりそうになっていたはずだからね。

「紗耶香、見計らったように良いところに来たわね。まあいいわ。さつき十代と和人を呼び出したのだけど、貴方には和人の方を相手してもらっていいかしら」

こちらの世界に来た時、ちゃんと私のデッキも用意してあった。用意されていたデッキは私が元の世界でも使っていたデッキだったから、大抵の相手には負けない自信はある。

「別に構わないよ。それで二人はどうするつもりだい？」

ふむ、この様子だと私が見つからなかったら、二人のうちのとちらかが和人の相手になったわけだ。そうなった場合、二人の性格を考えたらジュンコくんの方が相手になるのかな。

「一緒に連れて行くわ」

二人も一緒ということとは予定に変更なし。私たち以外は原作通りになってくれたみたいだね。

「話を少し戻すけど、私に翔くんがここにいる理由と和人くんたちを呼んだ理由は教えてくれないのかい」

本当はすでに知っていても、話の流れからして、ここは確認しておくべきだろう。

「実は、この男は私たちのお風呂を覗いたんです」

「本当に最低ですわ」

「だから誤解だつてば」

翔くんは半泣きになっているけど、呼び出された場所をロクに確認しないで、ノコノコと来た君が悪いよ。

それに、このラブレターに書かれている字は恐ろしく汚い。翔くんは明日香くんがこんな字を書くと思っっているのかな。そして、明日香くんの性格を考えると、こんな不気味なキスマークを付けることとはないだろう。

「翔くん、これが明日香くんの字だと思ったのかい？」

「う、初めてラブレター貰ったから舞い上がっちゃって字なんか確認してなかったよ」

それは何とも言えないね。私には気休めに頑張っただけだし、言えない。

「明日香くん、私が鮎川先生に後で何とかしてもらおうよって伝えておこう。一度起こったことは二度起こる可能性があるしね」

「だから誤解だつてば」

ふふふ、悪いね。やっぱり翔くんみたいなタイプの男はいじりがいがあつて楽しいな。

「とりあえず無駄な時間を過ごす時間はないね。早く行くことじゃないか」

「ええ、そうしましょうか」

でも、和人くんには今日のことを説明してなかったからね。何かが起こるかもしれない程度は伝えておいたけど、ちゃんと起きているのかな？

side 和人

その音はまさに俺が寝ようとしていた時に部屋で鳴り響いた。

「いったい、こんな夜中に誰だ。せつかく寝ようとしていたのに。紗耶香からのメールか。」

「丸藤翔は預かった。返して欲しくば女子寮まで来い」

相手のアドレスがわからない。つまり、これは紗耶香のイタズラではないということか。

おい、ってことはイベントか。俺は何も聞いてないぞ。紗耶香の奴め、また説明をサボリやがったな。

だからといって無視するわけにもいかない。こんなイベントを紗耶香が見逃すはずがないからだ。今の十代に関わりがある女子は紗耶香を除けば明日香しかない。十中八九、このメールは明日香から送られてきたものだろう。おそらく紗耶香は明日香たちと一緒にいるはずである。

「おい、和人。メールを見たか」

ああ、俺も見たよ。

部屋を出たら、十代も同じように部屋から飛び出してきた。

こいつのおかげで、また寝る時間が減りそうだ。

紗耶香め、あれほど事前に説明しろと言っておいただろ。

「さっさと行くぞ。何が理由で翔が向こうにいるのか知らないが、一応行った方がいいだろう」

「おう、行こうぜ」

この前の黒いコートを着ると、ポケットに入れた俺のPDAにも一通メールが届いた。

「場所は女子寮近くの湖だよ。ボート乗り場からボートに乗ってきてくれればいい」

こいつは反省ということを知らないのか。事前に教えておくように俺はあれほど言ったよな。

でも、今はそんなことを言っている場合じゃない。すぐに行けばイベントは早く終わってくれる。早く終われば、寝る時間が減るのが少なくなる。

しかし、翔は何で女子寮にいるんだ。晩飯の時は寮にいたはずだ。俺も十代たちと一緒に食ったのだから間違いない。

「おい、十代。翔の奴はどうしたんだ。どうしてお前の部屋にいない」

「さあー、全く分からん。やってたゲームにも全然集中してなかったな。それに、やけに時計を気にしていたぞ」

じゃあ、明日香たちに呼び出されて捕まったのか。それなら紗耶香の奴も説教してやらないといけない。捕まるのを知っていてイベントのために止めなかったのならば、俺はアイツのことを軽蔑する。

ボートを漕ぎながら俺はとっさに選んだデッキを見て、ため息をついた。

いきなり夜中に呼び出されたから、どのデッキを持ってきたのか確認するのを忘れていたのだ。

しかし、このデッキか。まだ完全に完成していないし、夜に使うには気が進まないんだよな。

十代と俺が漕ぐボートが紗耶香たちがいる場所まで着くと、そこには紗耶香と明日香、そして翔に、知らない女子が二人ほどいた。

「で、何で翔は捕まっているのか説明してくれないか」

そう、俺が質問すると、返ってきた答えは俺の想像とは異なるものだった。

「この男が私たちのお風呂を覗いたからよ」

ナンダッテ。

「翔、本当か？」

「誤解だって、僕はラブレターで呼び出されて」

その後、しばらく名前も知らない女子と翔の言い合いが続いていたのだが、面倒なのでカット。

結局、十代と明日香、俺と紗耶香がデュエルして勝ったならば、翔がしたことを先生に言わないで見逃してくれることになった。

何故、覗いた本人がだけ何もしないで許されるのかわからないけど、ここは俺たちがデュエルを受けるしかなさそうである。ついでに、後ろの二人は誰なんだ。

始めから明日香たちの目的は十代の実力を確かめることらしく、デュエル前に翔はこちらのボートに来ることになった。そして、四人の中から明日香の方が前に出てきた。どうやらデュエルは先に明日香と十代から始めるらしい。

「《サンダージャイアント》でダイレクトアタックだ」

少し苦戦するかと思ったが、そこは主人公らしく最後に逆転して勝利を飾った。

翔、跳んで喜ぶな。ボートが揺れるだろうが。

「そんな、明日香さんが負けるなんて」

「まぐれに決まっていますわ」

「やっぱりクロノス先生に勝っただけはあるってことだね」

紗耶香だけは感心しているように見えるが、俺にはわかる。アイツはすでにデュエルから興味は失せている。

次は俺の出番か。

紗耶香のデッキは《代行者》を中心としたデッキだったはずだ。

《代行者》は天使族だったから《天空の聖域》と《神の居城・ヴアルハラ》と厄介なサポートカードもある。

できれば戦いたくない相手でもあるんだよな。

「さて、明日香くんに勝ったのは見事だったと言ってあげよう。でも、まだ私が残っていることを忘れてないかな」

「紗耶香がそう言えば、すぐに十代と翔は静かになる。

「和人、頑張れよ」

「頑張ってくださいッス」

やれやれ、これは少し頑張らないといけなさそうだ。

「紗耶香、手加減無用よ」

「明日香さんの仇を討ってください」

「どうやらあちらも気合は十分みたいだ。これは気を抜けない勝負になるな。」

「デュエル」

お互いにデュエルディスクを構えてカードを五枚ドロウする。

「先攻は渡そうか」

「いや、必要ないよ。私は後攻でいい」

「分かった。手加減はしないからな。ドロウ、俺は手札から《ミイラの呼び声》を発動、そして《邪神機 - 獄炎》を特殊召喚する。カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「そのデッキか。それなら先攻を上げたのは間違いだったかもしれないね」

和人LP4000

場 / 《邪神機 - 獄炎》 攻2400

《ミイラの呼び声》、セット2枚
手札2枚

「すげえ、1ターンで上級モンスターを呼び出した」

この程度で、感心されても困る。紗耶香のターンになれば簡単に破壊されるのは分かっている。それでも、次への布石のため、カードを温存する必要があったのだ。

「まずはドロー。私はフィールド魔法《天空の聖域》を発動する。さらに手札から《ヘカテリス》を捨てることで、デッキから《神の居城 - ヴアルハラ》を手札に加える。そして、《神の居城 - ヴアルハラ》を発動」

夜の中に荘厳な空間が現れる。ソリッドビジョンだとわかっていても、すごいと言えない。

しかし、1ターン目からキーカードを引くとは。このままでは押し切られることになる。

天使族とアンデット族は基本的な地力でアンデット族が劣っている。力比べになればアンデット族が不利だ。さらに、今はただの力比べも無意味だ。そして、《天空の聖域》がある限り、天使族との戦闘におけるダメージを0にする効果がある。

「では、早速出番だよ。ヴァルハラの効果で手札から《The splendid VENUS》を特殊召喚する。そして、《シャインエンジェル》を守備表示で通常召喚する」

早速きたな。厄介な効果持ちの最上級モンスターにリクルーターか。

「当然、私が攻撃するのは《邪神機 - 獄炎》だ。私は《The splendid VENUS》で攻撃して、カードを一枚伏せてターンエンドだよ」

紗耶香 LP4000

場 / 《The splendid VENUS》 攻2800

《シャインエンジェル》 守800

《神の居城 - ヴァルハラ》 《天空の聖域》、セット1枚
手札1枚

《The splendid VENUS》の効果で、《邪神機
- 獄炎》の攻撃力が500下がったせいで、俺の残りライフは31
00だ。

「そんな、相手の実力は和人くん以上だよ」

「やっぱ、すげえ。二人とも凄すぎるぜ」

「俺のターン、ドロー」

なにやら後ろから翔と十代の声が聞こえてくる。あと翔、お前のために戦っているのに、よくそんなことが言えるな。俺も《The splendid VENUS》が出てきた時はどうしようかと思っただけど、この手札なら勝てるかもしれない。

「俺は手札から《強欲な壺》を発動、カードを二枚ドローする。さらに《天使のほどこし》でカードを三枚ドローして二枚捨てる。そして、俺は手札から《アンデットワールド》を発動。新しいフィールド魔法が発動したことで、《天空の聖域》を破壊。これで、フィールドと墓地のモンスターは全てアンデット族になる。さらに、《死者への手向け》を発動、手札を一枚捨て、《シャインエンジェル》を破壊する」

「くっ、《天空の聖域》が。それに、《シャインエンジェル》を破

壊、まさか、その伏せカードは」

「まだまだ、手札から《ゾンビマスター》を通常召喚。そして、手札からモンスターを一枚捨てることで、墓地のレベル4以下のアンデット族を一体特殊召喚することができる。俺が選択するのは《シャインエンジェル》。念のために解説しておく、《アンデットワールド》は発動中、フィールドと墓地のすべてのモンスターをアンデット族にする効果がある。さらに、アンデット族以外はアド、生贄召喚ができなくなる」

「そんなフィールド魔法があるの」

明日香が驚いているが、今はカードの効果以外を説明する気はない。

「俺は《シャインエンジェル》が蘇生すると同時に罠カード、《王墓の罠》を発動。相手墓地のアンデット族が召喚されたことでフィールド上のカードを2枚破壊する」

破壊される《神の居城・ヴァルハラ》と《The splendid id VENUS》、これで紗耶香のフィールドは伏せカードが1枚だけ。ここは一気にたたみかける場面だ。

「《ゾンビマスター》と《シャインエンジェル》で紗耶香にダイレクトアタック」

「くっ」

紗耶香LP4000 LP800

「これで、俺はターンエンドだ」

和人LP3100

場ノ《ゾンビマスター》攻1800

《シャインエンジェル》攻1400

《ミイラの呼び声》

手札0枚

「私のターン、ドロ。私は《テラ・フォーミング》を発動して、デッキから《天空の聖域》を手札に加え、発動。《アンデットワールド》を破壊する。さらに、《天空の使者 ゼラディアス》を通常召喚する」

《天空の使者 ゼラディアス》は下級モンスターの中でも最高クラスの攻撃力を持つモンスターだ。《天空の聖域》がなければ破壊されるというデメリットもあるが、俺のこのデッキに除去系のカードは少ない。破壊される可能性は低いと考えたか。

「そして、《シャインエンジェル》を攻撃、《シャインエンジェル》は元々、私のカードだからデッキから《オネスト》を特殊召喚する。そして、第二メインフェイズで《オネスト》は手札に戻る。これでターンエンド」

和人LP3100 LP2400

紗耶香LP800

場ノ《天空の使者 ゼラディアス》

セツト1枚

手札0枚

しかし、まだあのカードが来ていないということは最初に手札事故でも起こしたか。いや、それでも勝てるとは限らない。あいつの手札に《オネスト》がある以上は簡単に攻撃できない。

「俺のターンドロワー」

うん、このカードは。

運は俺に味方したみたいだ。《オネスト》対策用に入れていたこのカードが来てくれるなんて。

「俺は手札から《エネミーコントローラー》を発動、《ゾンビマスター》をリリースして《天空の使者 ゼラディアス》のコントロールを得る」

《オネスト》は確かに優秀なカードだが、場にカードがなければ意味はない。

「悪いな、紗耶香。《天空の使者 ゼラディアス》でダイレクトアタック」

「くっ」

紗耶香LP8000

「俺の勝ちだな」

「ああ、君の勝ちだ。やれやれ、次までに私もデュッキを組みなおしてくるよ」

やばかった。珍しく事故してくれたおかげで簡単に勝てたが、あと1ターン続いたら負けたのは俺だった。このデュッキを使うつもりなら、早く完成させないといけない。

「よし、帰るぞ。翔、迷惑かけたんだから、お前が漕げよ」

「えっ、僕が漕ぐの」

「何か文句でもあるの。君のために俺たちはデュエルしたんだけど」

「いえ、文句ありません」

「じゃあな。明日香と紗耶香に、名前も知らない二人」

「じゃあな」

「私はジュンコよ。これで明日香さまと紗耶香さんに勝ったと思わないでね」

「私にももえです」

何やら二人がわめいているが、無視だ、無視。一刻も早く寮に戻るぞ。これ以上ここに残っていれば厄介だと俺の勘が告げている。

「どうだったかな。二人の実力は」

後ろの二人はまださっきのデュエルは、相手の運が良かっただの、いろいろ言っているが、実際に戦った私から言えば、十代は下手なブルーの生徒より強い。紗耶香の幼馴染の和人も強い。

でも、紗耶香の本来の切り札である《代行者》たちは一度も出てこなかったし、和人の方の実力はまだ決めつけるのは早い。本来の紗耶香はもつと強いはず。今回は珍しく手札事故を起こしていた。

「確かに、もつと興味が出てきたわ」

「そうかい。それは楽しくなりそうだね」

紗耶香は相変わらず楽しそうな表情している。彼女も十代に興味があるのだろうか。

「今度は私が和人が戦ってみたいわね」

「私も十代と戦ってみるのは面白いかもしれないね」

紗耶香のその顔、何か企んでいる顔よね。

何かするつもりなの。

第四話 月一テスト（前書き）

不定期ですが、これからも更新していきます

第四話 月一テスト

月一テスト、そのせいなのか、俺が早めに学校に来たら、いつもよりピリピリした雰囲気だ。それも当然か、基本的にはこのテストが成績を決めることになる。成績によっては寮の昇格や降格があるのだ。

しかし、昨日は眠りが浅かったせいか、どうしても欠伸をしてみよう。

「おはよう、和人くん。眠そうだけど、今日はいつもより早いね」

紗耶香の奴は平常運転か。

ま、元の世界でもコイツは勉強で困ったことはなかったしな。

「昨日、翔の奴が一晩中何か言っていてやがったせいで、寝不足なんだよ」

さすがに何を言っていたのかまで聞こえなかったのだが、そのせいで何を言っているのか気になって余計に眠りが浅くなった。

「それで和人くんはテストの方は余裕かい？」

「まあな、実技で《フォーチュンレディ》か《鳥獣族》のどっちを使うか悩んでいるところだよ」

「できればバーンは避けた方がいいから、私としては《鳥獣族》をお勧めするよ。《フォーチュンレディ》のほうは《ファイリー》を中心としたデッキじゃないなら話は別だけどね」

それもそうだった。

あまりバーンデッキが好まれないのは、この世界に俺が来てからの悩み事でもある。

俺は元の世界では、バーンを使う《真紅眼》レッドアイズや《フォーチュンレディ》、《連弾バーン》に《シモツチバーン》を中心としたバーンデッキを組んでおり、他のスタンダードなデッキは組むだけ組んだといった感じなのだ。元の世界と違い、ライフが4000のこつちではバーンが簡単すぎる。

他の《The アトモスファイア》を切札にした《鳥獣族》、《レプティレス ヴァースキ》や《邪龍アナンダ》の《爬虫類デッキ》、《魔法使い》、《アンデット族》に《植物族》、その他色々組んではいるんだが、ほとんどが紗耶香とすらデュエルしていない試作デッキだ。

「こつちなるならもつとデュエルしておくべきだったと思うな。入学試験の時のデッキは癖が有りすぎるし、今からスタンダードな《ドラゴンデッキ》でも作ろうかな」

「私としては何であのデッキを選択したのか気になったけどね。それに、君の《魔法使い族》と《アンデット族》は十分スタンダードなデッキだと思うけど」

「う、うるさい。どうしても使ってみたかったんだ。《魔法使い族》って他人と被ってそうじゃん。元々、《ブリザードプリンセス》は漫画の方の明日香が使っている奴だし、他のカード自身も手に入れやすい。《アンデット族》にいたっては基本的にパワー不足だ」

紗耶香が使う《天使族》にパワーで押し切られたことは一回や二回ではない。

「確かに既に出てそんなデッキではあるね」

「ま、カードは限られているわけだし、他人と被るのが嫌とか言ってもしょうがないんだけどな」

「後は《The supremacy SUN》の《悪魔族》かな」

あれも微妙に使いにくいよな。

「プラネットシリーズか。漫画版と違って、こっちでは希少なだけなんだよな」

「だからこそ、私が《VENUS》を使えるんだよ」

「それもそうだよな」

《The アトモスフィア》は相手のカードの強さに依存するから使いにくいし、《爬虫類族》も癖がありすぎる。俺としても不安定なカードはできるだけ避けたい。今の《植物族》はある程度シンクロを前提にしたデッキでもあるので、組み直しが必要だ。

「それなら抜けばいいのに」

「それは嫌だ。俺にとって遊戯王は遊びだ。そのことを忘れたくないんだよ」

こんな世界に来て、それだけは譲りたくない。

俺のデッキでは《フォーチュンレディ》を代表して、いくつかのデッキはカードが気に入って作ったファンデッキなのだ。命がかか

った勝負ではガチなデッキを使うと言っていたけど、遊戯王が楽しい遊びであることを忘れてたくない。

「どう考えても矛盾しているな」

「どうしたんだい」

「なんでもない」

無理を言つて、紗耶香を不安がらせることもないな。その時が来たら俺自身が覚悟するしかない。結局、これは俺自身の心の問題なのだ。

「みなさーん、そろそろテストを始めるから席に着いてください」

「おっと、もうそんな時間なのかい。早く席に着かないと」

「テスト、頑張れよ」

「それはこっちのセリフだよ」

テストに関してはそこそこできた。あれぐらいの出来なら落第はないはずだ。

十代が遅刻してきたことには驚いたが、十代がいなくても紗耶香が慌ててなかったところを見ると、これも原作通りなのだろう。

しかし、翔の奴、アニキと慕っている十代を起こさずに自分だけ

登校してきたのか。

「違うッスよ。アニキがいくら起こしても起きなかったんッス」

「ありゃ、そうなのか」

「しかし、『情けは人のためならず』とはこのことだよな」

十代がトメさんからタダでカードパックを貰っていた。テストに遅刻しているにも関わらず、困っているトメさんを見たため、助けをいたらしい。

「しかし、誰がレアカードを買い占めたんだろうな」

隣にるのは入試番号1番の三沢だ。すでに十代と知り合っていたらしいが、俺の入学試験でのデュエルを覚えていたらしく声をかけられたのだ。

「ま、俺にとってはどうでもいい話だな。よほどの汎用性があるレアカードじゃないかぎり、この後の実技試験では使えない。もし、それぐらい汎用性があるレアカードなら手持ちの金額では買えん」

「最もだ。俺は自分で組んだこのデッキを信じている」

「俺も信じているけどよ。どんなレアカードなのか、スゲー楽しみだったんだよ」

「なるほど、そう言われるとそうだな。どんなレアカードなのかは見たい。後で誰が買い占めたのか先生に聞いて教えてもらうか」

「そうだな。よっしゃ、どんな奴が相手なんだろう」

「基本的には同じ寮の人間が相手になるらしいぞ」

「お、それならようやく和人とデュエルできるのか」

「ああ、そういやまだ十代とはデュエルしてなかったっけ。色々あつてすっかり忘れていた。特に誰かさんが女子寮で覗」

「わあー、わあー。あれは誤解だつてば」

「うん？」

事情を全く知らない三沢は首を傾げているが、十代は苦笑いしていた。

「ま、誰が相手でも負ける気はない。部屋とご飯に特に文句はないけど、さすがに毎朝歩く距離が面倒になってきたしな」

「ああ、確かに不便ツスね」

「別にいいじゃん。あれぐらい」

「俺は基本的にインドア派だし、朝は二度寝したいんだよ」

そんな感じで緊張感の欠片もない会話をしながらデュエルフィールドに行く、明日香と紗耶香が並んで立っていた。

「誰か呼ばれたか」

「このメンバーはまだ発表されていないよ」

そう紗耶香が言った途端、

「続いては、オシリスレッドの直枝和人とオベリスクブルーの天上院明日香ナノーね」

「おっ、明日香と和人か」

「これは」

「明日香さんと和人くんか」

「これは面白いことになったね」

ギャラリーも戸惑いを隠せないでいる。

当然か。オベリスクブルーでもトップクラスの实力を持ち、さらに美少女である明日香がオシリスレッドのはずの俺とデュエルをするのだ。これで話題にならないはずがない。

「手加減は不要よ」

「初めからそんなつもりは欠片もない」

こいつは楽しみだな。俺にとって、これが主要キャラとの初デュエルなのだ。楽しみじゃないと言えば嘘になる。

「なんか二人の間に炎が見えるッス」

「（万丈目くんは十代くんとデュエルするとして、前に私が和入く

んに負けたから明日香くんが選ばれたのかな。それにしても、ここで万丈目くんの取り巻きにレアカードを渡さなかったのは何故だろうね。今のクロノス先生なら和人くんのアンチカードぐらい渡しそ
うなものだけだね)」

S i d e 天上院明日香

紗耶香に聞いた話によると、和人は複数のデッキを所有しているらしいから前のデュエルは参考にならない。それに対して向こうは私のデッキを知っている。

厳しいデュエルになりそうね。

「それじゃあ、始めようか」

「ええ、始めましょう」

「『デュエル』」

「先攻は私ね。《エトワールサイバー》を攻撃表示で召喚、カードを2枚セットしてターンエンド」

それでも、私は私のデュエルをするだけよ。

「（《エトワールサイバー》か。それなら伏せカードのうち、一枚は十代にも使ったあのカードだろう。もう一枚は分からないけど、今は攻撃する時だな）」

「俺は《バードマン》を攻撃表示で召喚。さらにフィールド魔法を
デザートストーム
発動する」

これは不味いわね。思っていたよりも相手の攻撃力が高いわ。

「《バードマン》で攻撃」

「私は《攻撃の無力化》を発動。《バードマン》の攻撃を無効にし、
バトルフェイズを終了する」

「（予想が外れたか。いや、どちらでも対応できるようにしていた
と考えるべきだな）」

「なら、俺はカードを2枚セットしてターンエンドだ」

大丈夫、これならいけるわ。

「私のターン、ドロー。私は手札の《融合》を発動、フィールドの
《エトワールサイバー》と手札の《ブレードスケーター》を融合、
《サイバーブレイダー》を召喚、さらに装備魔法を装備、《バード
フュージョンウエポン
マン》に攻撃」

「悪いけど、逃げさせてもらう。《ゴットバードアタック》を発動
する。《バードマン》をリリースして、伏せカードと《サイバーブ
レイダー》を破壊」

「しまった。敵が1体の時は《サイバーブレイダー》の効果は戦闘
での破壊耐性しかない」

私のフィールドが空。通常召喚する前でよかったわ。

「私は《サイバークュチュ》を守備表示で召喚。ターンエンドよ」

これで次のターンまで耐えるしかない。

「（悪いな、明日香。お前に次のターンは来ない）」

「俺のターン、ドロー。俺は墓地の《バードマン》を除外して手札から《風の精霊 ガルダ》を特殊召喚。さらに、《ハンターアウル》を攻撃表示で召喚する。そして、《ハンターアウル》の攻撃力は自分フィールド上の風属性モンスターの数×500パワーアップする」

今は《デザートストーム》もあるから《ガルダ》の攻撃力は2100、《ハンターアウル》の攻撃力は2500。

「まずは《ガルダ》で《サイバークュチュ》を攻撃。そして、《ハンターアウル》で明日香にダイレクトアタック」

「きゃあ」

明日香 LP1500

何とか耐えられたわ。次のターンに《死者蘇生》さえ引けたら、まだ逆転のチャンスはある。

「（目が死んでいない。まだ勝つ気にいるか）さすがだな、まだ諦めていないみたいだ」

「当たり前よ。まだデュエルは終わっていないわ」

「いや、これで終わりだよ。速攻魔法を発動、場の鳥獣族を一体リリースしてデッキから同じレベルの鳥獣族を呼び出す。俺は《ガルーダ》をリリースして《ウィンドフレーム》を特殊召喚」

「あつ」

まだ和人のバトルフェイズは続行している。そして、《ウィンドフレーム》はまだ攻撃できる。

「私の負け、ね」

「ああ、今回は俺の勝ちだな。《ウィンドフレーム》でダイレクトアタック」

明日香 L P O

また負け、か。十代に続いて和人にも負けるなんて私もまだまだのようね。

Side 久条紗耶香

私の相手は三歩歩けば名前を忘れてしまいそうなモブキャラだった。

また手札事故を起こした時は焦ったけど、何とか勝つことができた。《コーリングノヴァ》1枚、《VENUS》2枚、《マスターヒュペリオン》1枚、《テラフォーミング》1枚、《天空の聖域》1枚って、始めのドロワーが《コーリングノヴァ》でなければ泣きたい手札だったよ。

やれやれ、和人くんの相手は明日香くん、私の相手はモブキャラ

とは神様は私のことが嫌いなのかな。

三沢くんはやはり安定した強さを見せてくれたし、翔くんはギリギリ同じレッド寮の生徒に買ったらしい。

これで私たちの中で、デュエルしていないのは十代くんだけだ。

「お、紗耶香か。これから十代の試合だぞ」

「相手は万丈目くんか。ようやく決着をつけられるね」

「そうね。入学直後は途中中断だったけど、今日は月一テスト、途中で止める人間はいないわ」

「アニキ」

「万丈目も一年のブルー男子ではトップ、十代がどんな勝負を見せてくれるのか楽しみだ」

そして、デュエルは私が知っている展開通りに進んでいった。

十代 LP1000

万丈目 LP1000

二人の残りのライフはお互いに1000で、今の十代くんの手札はゼロ。

「なあ、万丈目。ここで攻撃力1000以上のモンスターを引いたら面白いよな」

確かに、モンスターを引ければ周りとは君は面白いかもしれないけ

ど、万丈目くんにとっては面白いわけがないと思うよ、十代くん。

「万丈目さん、だ。しかし、お前のようなドロップアウトボーイにそんなカードが引けるはずがない」

そして、万丈目くん。確かに《E・HERO》は攻撃力が低いのが多いけど、多くのモンスターは攻撃力1000以上だし、戦士族には《増援》とか《戦士の生還》といったサーチカードも豊富にある。十代くんなら簡単に引けるだろうね。

「よっしゃ。俺は《E・HERO フェザーマン》を召喚し、プレイヤーにダイレクトアタック」

「うわああー」

「ガッチャー！楽しいデュエルだったぜ！」

いつも思うんだけど、これってソリッドビジョンのはずだよな。ただの映像であって現実化させているわけじゃないのに、なんで人が吹っ飛んだりするんだろう。まだ物が飛んできたときに顔を守ってしまうのはわかるんだけどね。

まさか、みんな自分で後ろに跳んでいるのかな。

「ああ、見せて貰いましたよ、遊城十代君」

十代くんが万丈目くんを倒して、テストに一区切りがついた頃、鮫島校長のアナウンスが聞こえてきた。

「君のデッキへの信頼感、モンスターとの熱い友情、そしてなにより、勝負を捨てないデュエル魂、それはここにいる全ての者が認め

ることでしょう。よって勝者遊城君、君はライイエラーへ昇格です」

そして、校長先生は私たちのほうに視線を向ける。

「そして、直枝和人君。あなたにも優れた戦術を見せてもらいました。君の強さも会場の全ての人が認めてくれることでしょう。よって、君もライイエラーに昇格です」

「よっしゃ。あ、でも、俺はこのままがいい」

「ほう、直枝君。あなたはどうしますか」

「俺は昇格します」

そして、その日の夜。

俺は再びレッド寮に戻ってきていた。

「あれ、和人君。どうしてレッド寮に」

「今はイエロー寮に空きがないらしいから、しばらくはレッド寮で過ごしてくれだって」

まあ、初めの月一テストだからな。降格するにしてももう少し様子を見てからってことなんだろうな。せっかく朝ゆっくりできると思っていたのにな。

「そういうわけで、また頼むわ、十代」

第五話 廃寮探索 VS 魔法使い（前書き）

連続投稿します。

第五話 廃寮探索 VS 魔法使い

「廃寮、ね。使わないなら綺麗に掃除してレッド寮用に解放してくれたらいいのにな」

しかし、ここを日常で使うとしたら学校から遠いことが欠点だな。通学の面倒さはレッド寮と大差ない。結局は朝起きるのが面倒なのは変わらないか。

ま、元々の使い道を考えたら、それでも良かったのかもしいれないけど。

「和人は怖くないのか」

そんなことを十代が聞いてくるが、もちろん俺の返答はイエスである。怖い物は怖い。それは例え夜のデュエルで不気味な《アンデット族》デッキを使ったとしても変わらない。

「当然、怖いぞ。ただ疑問に思ったただけだ」

それに廃寮のままにしておくから怖いのだ。使わないなら使わないで、壊してしまえばいい。もしくは綺麗に整備すれば怖さは半減するはずだ。

「全然そうは見えないんだなあ」

そういえば、ようやく登場したな。十代と同室の奴らしいけど、今まで顔を合わせたことがなかった。名前は確か前田だったはず。紗耶香と違って、この時期はあまりアニメは見えていなかったからな。使用するデッキは見た目に合ったコアラなどを使った《獣族》デ

ツキだったはず。

「それにしてもいいのか、十代。明日香は俺たちが来るのに反対していたぞ」

「別に肝だめしぐらいならいいんじゃないか」

「そうかよ。ま、俺も暇つぶしになるなら別にいいんだけどな」

夜に外出することは校則違反なのだが、元の世界では夜遅くまで遊んだりしていた俺としてはアカデミアの校則は少し窮屈なのだ。本来なら紗耶香もいるはずだったのだが、紗耶香は少しやることがあると行っていたので今日は不参加である。

「しかし、男だけで肝だめしってのも味気ないな。明日香を引き止めるか。紗耶香の予定が空いている日に変えるべきだったか」

「あれ、和人くんって。そういうキャラだっけ」

「いや、別にこうやって男だけで遊ぶのが嫌だと言っているわけじゃないけど、せっかくの肝だめしだし、女の子がいた方が気分的に盛り上がらないか。男の悲鳴を聞いてもつまらんだろ」

だからといってあの二人を一般の女子に入れていいのか、と聞かれれば疑問なただけだな。二人とも下手な男子より勇ましいし。

「そういうもんか」

そして、十代。お前はもう少しデュエル以外にも興味を持つべきだ。そのままだと将来苦労することになるぞ。特にある小学生と同

級生の板挟みになって。

しかし、ここでは何が起こるんだっけ。十代が外から来たデュエリストとデュエルするのは覚えているんだけど、何でデュエルするだっただかな。こうなるなら紗耶香に詳しい話の流れでも書いてもらったほうがいいな。

「でも、ここはただの壊れた寮って感じだな」

「そうだな。何かいそうな気はし」「キャアー」「十代」

「おっ」

「え、えっ。ちょっと待ってよ。アニキー」

「待つてほしいんだなあ」

声を聞いた途端、十代と俺は走り出していた。後ろで二人が何か言っている気がするけど、今は緊急時なので無視だ。

「今のって明日香の声だよな」

「そうだと思う。悲鳴だったし、よく分からんが、普通の女子は廃寮になんて近づかないだろう」

俺はただ悲鳴が聞こえたから走っただけだし、声だけ判別できるほど明日香と付き合いがあるわけではない。しかし、明日香の話と先ほど別れたばかりなことを考えれば明日香である可能性は高いと思っっている。

走っている途中に一枚のカードと写真が落ちていた。

カードは明日香が使っている《エトワールサイバー》。そして、

写真の方は俺が覚えている限りでは明日香の兄の天上院吹雪のはずだ。そういや、行方不明になった兄の情報を探しているとかなんとか紗耶香が言っていたような。

「ここにはいないか」

「見るよ、足跡があるぜ」

「二つ、か」

十代が見つけた足跡は二つだ。両方とも奥の方に続いている。先ほどの悲鳴を考えると明日香は連れていかれたはずである。明日香の足跡があるはずがない。足跡があるにしても、こんな綺麗な形で残るわけがない。

おかしい。原作ではデュエルするのは十代だけだったはず。となると、この流れだともう一人は俺の分になるのか。

「おい、和人。早く行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな。すぐに行く」

今はここで考えても仕方ない。とりあえず進んでみるだけだ。

こういうことか。これが原作通りか知らないが、タイタンは十代ともう一人いた男が俺の相手になるらしい。

しかし、この男か。原作の感じだとマリクはグルズを解散しただろうし、コイツも本職に戻ったのか。いや、こいつの風貌では薄気味悪いだだけだと思っけどな。

「少し場所を変えましょうか」

「ということはタッグデュエルじゃないのか」

「は、パートナーがタイタンごときでは私の足を引っ張るだけです。まずはあなたを倒し、その後に遊城十代です」

性格のほうは全く変わってないみたいだな。それもそうか、あくまで遊戯に復讐したかったのはマリクだけだし、こいつらはレアカードに群がるハイエナと変わらないんだった。

ま、十代はタイタンに勝ってくれるだろうし、俺の方も勝つただけだな。

「そうか。それじゃあ、早く始めようじゃないか、パンドラ」

「おや、私の名前を知っていましたか」

「一応、な」

グールズのブラック・マジシャン使い、裏遊戯に負けた相手。しかし、俺が見たのは漫画の方だけだったから、あのルールがよく分からない勝負だけなんだよな。

そう考えると漫画の方って、けっこうM & a m p ; Wやりこんでいるはずの海馬が《クリボー》の効果を知らなかったり割りと無茶苦茶なんだよな《死者蘇生》を相手のターンに使えたりするし、あれから結構時間も過ぎたから漫画の知識も当てにはできそうにもない。

そんな適当なことを考えながら腕に装着したデュエルディスクを構える。

「デュエル」

「俺のターンからだ。ドロー、俺は手札から《闇竜の騎士》を攻撃表示で召喚」

「さらに《テラフォーミング》で《アンデットワールド》を手札に加えて、そのまま発動」

フィールドが前と同じようにカードのイラスト通りの風景に変わる。

「カードを2枚セットしてターンエンドだ」

「私のターンです。ドロー、私は手札から《魔導戦士ブレイカー》を攻撃表示で召喚します。このモンスターは召喚した時に魔力カウンターを一つ乗せる。カウンターを1つ使用して右のカードを破壊します。さらに手札から速攻魔法サイクロンを発動。《アンデットワールド》を破壊、さらに《デイメンション・マジック》を発動。《魔導戦士ブレイカー》を生け贄に捧げ、あなたの《闇竜の騎士》を破壊し、手札から魔法使い族モンスターを一体特殊召喚します。現れなさい《ブラック・マジシャン》」

ちっ、伏せていた《ミラーフォース》が破壊されたか。やっぱり《魔法使い族》って厄介なデッキだ。遊戯が使っていただけに初期から優遇されているしな。しかも《アンデットワールド》まで破壊されるとは思わなかった。

これは少しでも退けば押し込まれるな。でも、速攻でエースモンスターを召喚するとはパンドラも意外とやるかもしれないな。伊達に《ブラック・マジシャン》使いを名乗っていないか。

しかし、まだリバーズカードはもう1枚ある。

「リバーズカード、オープン《奈落の落とし穴》、これで《ブラック・マジシャン》をゲームから除外する」

「ほう、伏せていた罠カードは《ミラーフォース》だけではありませんでしたか。どうやら簡単な仕事ではなさそうですね」

「そりゃ、どうも」

「それでは、カードを一枚セットしてターンエンドです」

「ドロー」

さて、どうするかな。相手の手札は2枚、セットされたカードが一枚。俺の予想では伏せられたカードは攻撃反応タイプの罠カードだろう。

それに対して俺は手札3枚だけか。

ま、このカードをドローしたおかげで楽になるけどな。

「俺は魔法カード《ミイラの呼び声》を発動。1ターンに一度、自分フィールド上にモンスターがいないとき、手札からアンデット族を特殊召喚できる。俺は手札から《龍骨鬼》を特殊召喚する」

こいつはパンドラのような魔法使いデッキに対するアンチカードになる。こいつがいる限りパンドラは簡単には攻めることはできない。

「《龍骨鬼》、魔法使いデッキに対するアンチカードですか」

「さらに、《ピラミッドタートル》を攻撃表示で召喚。そして、2体でダイレクトアタック」

「《攻撃の無力化》を発動。攻撃を無効にして強制的にバトルフェイズを終了する」

《攻撃の無力化》か。紗耶香だったら《マスター・ヒュペリオン》で破壊されているよな。やっぱり紗耶香相手に攻撃反応の罠カードは減らした方がいいかな。

「それなら俺はターンエンドだ」

「私のターン、ドロウ。私は《霊滅術師カイクウ》を召喚。そして、魔法カード《天よりの宝札》を発動。お互いに手札が6枚になるまでドロウします」

なっ、原作効果か。いや、確かにこの世界は原作だからおかしくないんだけど、ここでそのカードが出てくるか。俺もドロウできる以上、ここは《命削りの宝札》じゃなかったただけ良かったと思うべきだな。

「ここからが私のショーの始まりです。私は再び手札から速攻魔法ディメンション・マジックを発動します。私は《霊滅術師カイクウ》を生け贄に捧げ、あなたの《龍骨鬼》を破壊します。そして、手札から《ブラックマジシャン》を特殊召喚。さらに、魔法カード《千本ナイフ》を発動。《ピラミッドタートル》を破壊」

この状況がたった1ターンでひっくり返されるとは思ってたなかった。イカサマをするような雑魚キャラっていう印象があったから甘くみていたな。

「それでは、《ブラックマジシャン》でダイレクトアタック。黒・
ブラック・マジック
魔・導」

和人LP1500

「カードを2枚セットしてターンエンド。これこそが本当の私の実
力ですよ。あなたにこれが突破できますか」

パンドラの自慢気な笑い声が聞こえてくるが相手する必要はない。
寧ろパンドラがドロウさせてくれたおかげで勝てる。あのカードは
相手の手札が多いときにこそ使うカードだ。

さっきまで俺の手札は0枚だったのにパンドラが使った《天より
の宝札》のおかげで手札が充実している。これは致命的なミスだ

「俺のターン、ドロウ」

さて、どうするか。手札は7枚ある。フィールドには《ミイラ
の呼び声》がまだ残っているし、セットされたカードを破壊したか
つたら、手札にある《大嵐》で破壊できる。

やっぱりここはコイツで勝つのが一番いいな。

「俺は《大嵐》を発動。フィールド上の魔法、罫カードを全て破壊
する」

「（《ミラーフォース》と《魔法の筒》がやられましたか）」

「そして、再び《ミイラの呼び声》を発動。ついでに《テラ・フォ
ーミング》も発動して《アンデットワールド》をデッキから手札に
加えて、そのまま発動。で、《真紅眼の不死竜》を特殊召喚。更に

《ゾンビマスター》を通常召喚する」

《真紅眼の黒竜》のアンデット版が姿を現す。例えその姿が屍になつたとしても、迫力が衰えることはない。

「しかし、攻撃力は2400と1800。私の《ブラックマジシャン》には及びません」

「そこは魔法カードの出番だろ。ただモンスターが強いだけでは勝てないのが、このゲームだしな。手札から永続魔法《一族の結束》を発動。墓地に存在する元々の種族が一種類の時に攻撃力を800上げる」

「なっ」

全体的に攻撃力に難があるアンデット族にとって、《一族の結束》は役に立つ全体強化だ。ま、大抵はこれも返しのターンで《マスター・ヒュペリオン》に破壊されるんだがな。

「《真紅眼の不死竜》で《ブラック・マジシャン》を攻撃」

パンドラLP3700

「くっ」

「さらに《真紅眼の不死竜》の効果発動。このカードがアンデット族モンスターを破壊した時、そのモンスターを相手の墓地から蘇生する」

《アンデットワールド》とのコンボこそが、このカードの真骨頂。

《真紅眼の不死竜》の効果でモンスターを奪い、追撃をかける。今の俺が使う《アンデット族》の戦術になる。戦術を使い分けるためにサイドデッキにいくつかのカードを入れている。

「何ですと」

「《ゾンビマスター》のダイレクトアタック」

「くっ」

パンドラLP1100

「あんたもコイツで倒されるなら本望だろ。《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック」

「ぎゃあー」

パンドラLP0

「パンドラ、今なら警備に突き出さないでやる。さっさと島から出ていけ」

「ち、覚えておきなさい」

おお、テンプレな捨てゼリフ、初めて言われたぞ。

その後、タイタンは闇の中に姿を消したらしく、明日香は十代に

よって無事に救出された。

ついでに、俺がデュエルしていることを知らず、合流した時に「大変な時に迷子っスか」と言いやがった翔を寮から出る時に、軽く閉じ込めてやり、半泣きになったところで許してやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9899s/>

遊戯王 二人の転生者

2011年11月16日18時52分発行